

■野邑理栄子氏

テーマ： 高商派出身者と鈴木商店

①神戸高商の特徴



明治 30 年代において屈指の国際貿易都市であった神戸は、やはり屈指の商業都市であった大阪と官立高商の設立場所をめぐって激しく競い合い、明治 33 (1900) 年 1 月の帝国議会衆議院において多数決の結果、わずか 1 票差で勝利し神戸高等商業学校（通称：神戸高商、現・神戸大学）は明治 35 (1902) 年、東京高商（現・一橋大学）に次ぐ全国 2 番目の官立高商として設立された。

同校は当時商業学・経済学分野の最高学府であるとともに、当兵庫県で唯一の高等教育機関でもあった。

※神戸大学は神戸高商の創立から数えて今年 117 周年になる。

※神戸高商の系譜を引く神戸大学の学部は経済学部、法学部、経営学部の 3 学部。

初代校長の水島鍬也^{てつや} [上の写真] は 22 年もの長きにわたり、神戸高商の礎を築いた。水島を中心とする神戸高商の人間味あふれる寺子屋的な趣は「葺合村塾」^{ふきあい}（葺合は当時の学校所在地。昭和 9 (1934) 年、現在の灘区六甲台町へ移転）と呼ばれた。



神戸高商の校舎（明治 42 年頃）

○目指せ！ 国際人、海外貿易のリーダー

・「本校の目的は、主として自ら大規模の商業又は外国貿易を経営すべき人物を養成するに在り」（明治 36 年 5 月 15 日、水島校長始業式式辞）

・海外勤務（横浜正金銀行ニューヨーク出張所勤務）の経験があった水島は国際性を重視し、外国人教師による語学教育、英語による授業、海外研修等に力を注いだ。

○「実務の人」になれ

・「授業上に於ては、所謂学理に偏するの弊を避けて、成るべく実地活用の才を養成し、又特に外国語に重きを置き、海外貿易に従事するに適せしめんと欲す」（明治 36 年 10 月 25 日、水島校長開校式式辞）

・水島は学理偏重を否定し、現実的な実践的商業教育を重視した。

・学内に商品陳列館が設けられ、当時世界に流通していたさまざまな商品が展示されていた。

・日本にタイプライターがほとんどなかった当時、タイプライター室が設置され、学生に英文タイプを打たせていた。（出光佐三[出光興産創業者]談）

②神戸高商から鈴木商店へ（神戸高商出身者の鈴木商店入社状況）

・神戸高商出身の鈴木商店社員数の全期間（明治 41 年～昭和 2 年）合計は 157 名。

・第 1 回生（明治 40 年）92 名の就職先は貿易関係（三井物産ほか）、銀行（日本銀行、住友銀行、横浜正金銀行ほか）、製造、回漕、鉄道他であったが、鈴木商店へ就職した者はいない。

・第 2 回生（明治 41 年）142 名中、1 名（松原清三）入社。

・第 3 回生（明治 42 年）101 名中、3 名（高畑誠一、望月和三郎ら）入社。

※高畑誠一（後・日商を創業、日商会長）[下の写真]は卒業成績第 2 位、望月和三郎は卒業成績第 3 位であった。

※高畑誠一の第一志望は三井物産を筆頭に森村組、高田商会等の外国貿易商社であったが、水島校長の勧めで鈴木商店に入社。

※大正 6(1917)年 7 月 15 日、鈴木商店ロンドン支店長として赴任していた高畑はテムズ川に「水島号（MIDZUSHIMA）」と命名したボートを浮かべて母校の校歌「^{しょうしん}商神」を歌ったという。

・明治 43(1910)年には第 4 回生 107 名中、1 名（北濱留松）が、また既卒者（転職組）3 名（高畑と同期の永井幸太郎[後・日商社長、貿易庁長官][下の写真]ら）が入社。明治 44(1911)年には転職組がさらに 2 名入社。



若き日の高畑誠一（右）と永井幸太郎（左）

・神戸高商から鈴木商店への入社は明治 41(1908)年から鈴木が経営破綻する昭和 2(1927)年まで続くが、鈴木の高商全盛期である大正 5(1916)年から同 8(1919)年までの 4 年間は毎年 20 名前後が入社。

※大正 6(1917)年、鈴木商店は貿易年商で三井物産を凌駕し日本一になる。

・神戸高商出身の鈴木商店の社員数のピークは大正 9(1920)年で、108 名。(内訳：本店 42 名、国内支店等 14 名、海外支店 52 名)

③世界を相手の暴れん坊たち（海外派遣された鈴木商店の社員）

・大正 9(1920)年時点での海外に派遣された神戸高商出身の鈴木商店社員の勤務地は、ロンドンを中心とする欧州が 14 名、ニューヨーク・ポートランド・シアトル・サンフランシスコ・テキサスを中心とする北米が 14 名、香港・上海・大連・漢口、ハルピンを中心とするアジアが 22 名、大洋州・南米が各 1 名で、海外勤務地は全期間を通じて 15 カ国に及んだ。

④全国から神戸へ、神戸から世界へ

・神戸高商出身の鈴木商店社員数・全期間合計 157 名の出身地は、近畿 75 名（内兵庫 40 名）、四国 27 名（内高知 12 名）、中国 19 名、九州 18 名、中部 14 名、関東 3 名、東北 1 名。

※高知県は金子直吉の生誕地で、高知商業学校（現・高知市立高知商業高等学校）の卒業生を中心に多数鈴木商店に入社した。彼らは神戸高商出身者である「高商派」に対し「土佐派」と呼ばれ、ともに鈴木商店の黄金期を牽引した。

■小林由佳氏

テーマ： 鈴木商店が神戸の発展に如何に貢献したか

①事業を通じて富・活気をもたらした。

国際港湾都市&ものづくり都市への発展を牽引した。



鈴木商店と言えば、まず金子直吉がイメージされがちであるが、洋糖引取商として鈴木商店の礎を築いた創業者・鈴木岩治郎[左の写真]も腕の立つ商人だった。

明治7(1874)年、岩治郎は神戸元町の亀井堂（現・亀井堂総本店）に近い弁天浜に砂糖商・鈴木商店を創業。菓子職人を目指し長崎で菓子修業をした岩治郎は、亀井堂の創業者・松井佐助と出会い、神戸名物として好評を博した「瓦せんべい」の材料の砂糖を売り込んだ結果、亀井堂は鈴木商店の最大の得意先となり、両者は互いに切磋琢磨しながら発展したと伝えられている。

明治15(1882)年、岩治郎ほか7名が発起人となり「神戸石油商会」が設立された。同商会設立の目的は、それまでの同業者の分離孤立から生じる諸弊害を除去するため共同企業をこの分野にはじめて導入し、外国商社による石油価格の吊り上げ防止により需要者の保護をはかること、およびその集中資本を活用して共同油槽（石油タンク）の設置により石油配給を確保することにあった。

その後、岩治郎は神戸の財界にも進出し、貿易会所副頭取ほかの要職を歴任する一方で明治19(1886)年、鈴木商店は「神戸有力八大貿易商」の一つに数えられるまでに成長する。しかし明治27(1894)年6月、岩治郎は52歳の若さで急逝し、これを機に金子直吉が大番頭として表舞台に登場する。

鈴木商店という土を耕してそこに種をまいた岩治郎の存在があつてこそ、その後の鈴木商店の大躍進につながったとも言える。

②大志を抱く者をひきつけ、挑戦するDNAを神戸に植え付けた。

金子直吉の器の大きさが磁場となり、“一旗揚げよう”という挑戦者を引き寄せた。



- ・金子直吉は若手社員に大きな仕事を任せた。
- ・神戸は「新参者」で出来た港町。他人の失敗に無頓着な土地柄。
- ・神戸には神戸高商という優秀な人材を輩出する教育機関が存在した。

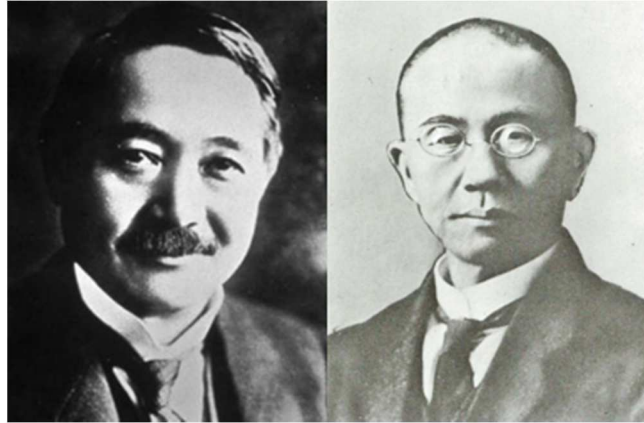
金子は神戸の地において、後年の企業家（父親が鈴木商店に勤務していたダイエーの中内功、ノーリツの太田敏郎、アシックスの鬼塚喜八郎、ワールドの畑崎廣敏、木口衛、ファミリアの坂野惇子ら）を生む土壌を作ったとも言える。

※上記各氏の神戸における活躍振り、数々のエピソードも紹介。

③金子直吉と松方幸次郎はともに神戸の発展に貢献した。

松方正義（大蔵大臣、総理大臣）の三男というプリンス・超エリートで、後に「松方コレクション」と呼ばれる西洋絵画を中心とする膨大な数の美術品を収集した川崎造船所社長・松方幸次郎と、片や小学校にも行っていない“ボンさん”（見習いの小僧）上りの鈴木商店大番頭・金子直吉という対照的な二人は地元神戸で盟友となり、タッグを組んで神戸の臨海部を工業地帯に変貌させた。

※「山、海へいく」の元祖は金子と松方。

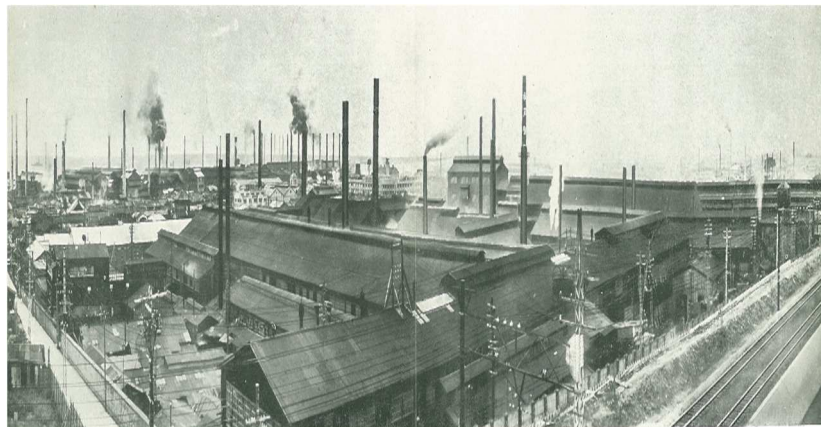


金子直吉（右）と松方幸次郎（左）

神戸製鋼所は大正 3(1914)年 7 月に第一次世界大戦が勃発すると、大戦景気に伴う船舶部品を中心とする鉄製品の大量需要に対応するため、山手工場の南側・^{わきの}脇浜の海岸を埋め立てて新工場を建設する計画を立てた。そして、金子直吉の発意により神戸製鋼所と川崎造船所が共同で出願し認可を受けて埋め立て工事を実施。工事は大正 8(1919)年にはほぼ完了した。

この埋立地には大正 7(1918)年 8 月 12 日に米騒動の煽りを受けて焼き打ちに遭い、全焼した鈴木商店と神戸新聞社の本店建物の瓦礫が投入されたと伝えられている。

この工事は工業用地に乏しい神戸では初めての大型埋め立て工事で、わが国の高度成長期に神戸市が進めた都市開発「山、海へ行く」の先駆けともなった。



脇浜の神戸製鋼所本社工場（昭和 10 年頃）



H A T 神戸

脇浜の埋立地一帯は阪神・淡路大震災からの復興をめざすシンボルプロジェクトの一事業「^{ハッ}T（Happy Active Town）神戸」（内臨海部は約 90ha）として開発され、現在は神戸製鋼所本社、神戸兵庫県立美術館、WHO神戸センター、人と防災未来センター、ブルメールH A T神戸（ショッピングモール）他多くの施設が集積され、西のハーバーランドと対をなす神戸の東の新都心となっている。

④女子教育の種をまいた鈴木よね



鈴木商店の女性店主・鈴木よね は神戸に女子教育の種をまいた。鈴木商店が売上高で日本一の総合商社になった大正 6(1917)年、よねの多大な援助によりわが国初の公立女子商業学校となる「神戸女子商業」（現・神戸市立神港橘高等学校）が誕生する。1 期生 100 人が卒業したのは大正 9(1920)年で、その多くは社会に進出した。

※この 100 人の内 7 名程度が、鈴木商店や鈴木取引先に入社した。

当時、鈴木よねは広岡浅子とともに、関西を代表する女性企業家として並び称された。

■村田裕子氏

テーマ： 金子直吉の人物像&人間掌握術

①関係会社の幹部から見た金子直吉

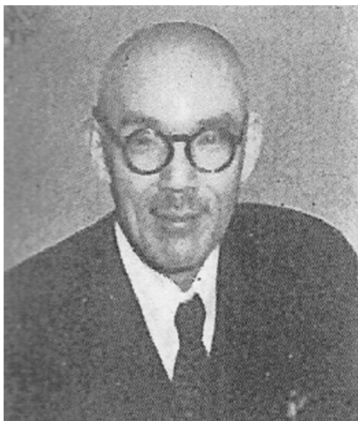


○田宮嘉右衛門（神戸製鋼所社長、播磨造船所社長・会長）[左の写真]
「金子さんの先見の明には感服に堪えぬ、而して大胆で又極めて意志の強固な方であった」「金子さんは無欲恬淡で、稀に見る私心の無い方であった」

○杉山金太郎（豊年製油社長）

「金子さんには一つの持病がある。それは煙突病という病気で、技術者から色々の事業計画を進言せられると直にその事業をやってみようという気持ちになって、工場を建設し煙突を建てるために所謂煙突病なる名前を付けられたのであるそうです」

金子は先見の明のある“煙突男”だったようだ。



○金子三次郎（沖見初炭鉱専務取締役、羽幌炭鉱鉄道専務取締役）[左の写真]

「(金子) 翁は「腕の金子」と云われた半面に勤儉力行家で又仁義に篤い人で、決して人の恨みを買うことはしなかった。昔鈴木商店で帝国燐寸会社なるものを創立したことがある。瀧川儀作が早速金子翁を訪問して、鈴木が燐寸を始められては之を向うに廻して闘う事は到底出来ない。皆ヤラレル、全滅してしまふ。何とか燐寸から手を引いて呉れろと頼みに行った。……（結局、金子は）帝国燐寸を吸収合併せしめ鈴木の直営を止めて大株主として東洋燐寸会社が新発足したのであるが、以来金子翁は何等の干渉もせず経営一切を瀧川君に一任していた」

金子は「他人の持っている茶碗を叩き落す様な事をしてはいけない」「勝は六七分でよい」とも語っており、決して一人勝ちは好まなかった。

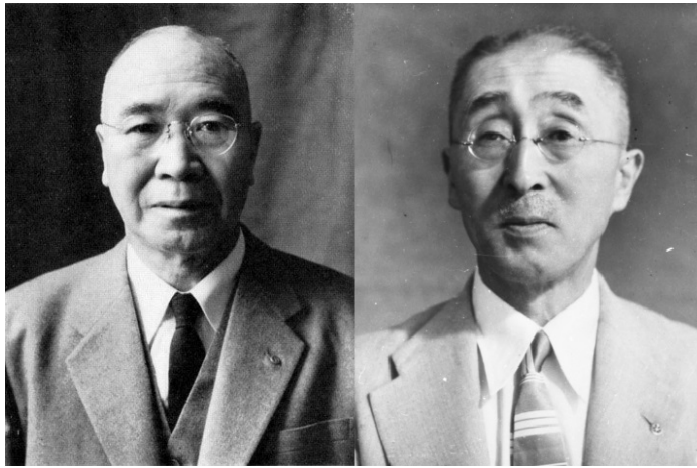
②鈴木商店の社員から見た金子直吉

○高畑誠一（鈴木商店ロンドン支店長、日商会長）

「金子翁の商工業に関する知識の該博なりし事も生来伶俐の上に勉強されたるのみならず、中年よりは耳学問により、よく内外の情報を咀嚼され、皆之を自己の物として吞込まれ画策されたことは通れである」

○永井幸太郎（鈴木商店取締役本店総支配人、日商社長、商工省貿易庁長官）

「私にとっては金子翁は師父と呼んだが一番適切に思われて、尊敬と親しみと信頼とを今に至るまでも、なお禁じ得ないのである」



高畑誠一（右）と永井幸太郎（左）

②金子直吉による部下の人心掌握



○小野三郎（帝人製機社長）

「(金子は) 若し^も其人^{そのひと}に長所あらば老若、学歴などを問わずドシドシ之を起用登用し、其才能^{その}を遺憾なく発揮せしめ、適材を適所におき人材を養成した」

○大屋晋三（帝国人造絹糸社長、商工大臣、運輸大臣）[左の写真]

「(金子は) その人の出身、縁辺^{えんぺん}などは一切問題にせず、その人に特徴さえあればこれを重要視した。能力さえあれば若い青年社員でも、海外至るところに派遣した」

当時、大学を出た優秀な若者たちが他の大きな会社ではなく、伸び盛りの鈴木商店を選んだ理由は、入ったばかりの自分たちも大きな仕事をさせてもらえるという魅力だった。

いくら金子に才能があったとしても、その偉業のすべてを到底一人でやり尽くせるものではない。金子は彼の思いを受けたやる気のある人々にドシドシ仕事を任せ、海外へも派遣する。そして、その仕事の一切の判断を彼らに委ねた。金子一人ではなく、力のある者たちが一緒になって上を目指して大きくしていった。勿論、その分人を見る目は厳しかった。

また、金子は「出世して人の頭となり大将となる事を希望するならば、人を上手^{うま}に使う事が大切である」と語り、実際金子は人の短所^{ひよ}を庇護し、その長所を挙げて失敗を決して咎^{とが}めなかった。

——— かつて、金子自身が失敗した時に店主・鈴木よねが金子にそのまま仕事を続けさせ、決して咎めなかったように。

③金子の人物像

・金子は朝起きてから夜寝るまで部下に指示を出し、日曜出勤は当たり前。私利私欲はなく、働きに働いた。

・金子は自宅に幾人もの書生を住ませた。そこでは損得勘定はなく、彼らにそれぞれの身の丈に合ったやりたいことを自由にやらせた。金子の教育方針は自分の息子同様に彼らに接するとともに、全くの放任主義で本人が希望するままに進学させ、見返りを一切求めないという大変ユニークなものであった。このことは、次の関係者の言葉からも窺うことができる。

○金子文蔵（金子直吉の長男、太陽産業監査役、太陽鋁工監査役）[左の写真]



「どの時代にも丁度一種の塾のようなわが家でした。ただ普通の塾と異なり（書生の）学資から食事すべて我が子同様にし、何等束縛もせず最高学府に進ませ、卒業後も各自の思うままに雄飛させ、良き人々を作り出すことを、何よりの喜びとしていたようです」

○小野三郎（帝人製機社長）

「金子さんの世話になって大学や専門学校を出た人で、私の知っている人だけでも二十数名はいる。私もその一人で、常に数名の者が養われていた。金子さんの学生養成法は常人と異なり、勉強せよとか人をして監督させるとか一切せず、全く放任主義で各人の進路についても自由だった。向学心に燃えている人、家庭の事情で進学出来ぬ人には惜気もなく学費萬端世話をする。而して、その酬いを一向求めない」

最後に、次の金子武蔵の言葉こそ、直吉の慈愛に満ちた人間性を最もよく表していると思われる。



○金子武蔵（金子直吉の次男、東京大学文学部教授、哲学者）[左の写真]

「父は欠点ばかり受け継いだ私を、若き日の自分の将来のように感じたためか、行末を案じて時にはマユをひそめることがあったにしても、しかしいつも胸中無限の愛情をひめて接してくれ、将来の志望選択についても、自分の意思はすべて否定して私の望むにまかせ、ただ時折自分の経験し、体験したことから私の将来に関することを選んで話をしてそれとなく導いてくれた。

そして父は私をただ一度たりとも欺いたことがなかった。冷酷と虚偽の多いこの世の中において、愛情と真実との存在を証明してくれたのは、ほかならぬ父だけである。耐えられないほどの苦しいことのあるとき、私は父のもとに帰りたいと思う。『タケゾウ、もう働くのはよせ』という声がすれば、いまでも私は喜んでこの世を去るであろう。『父なる神』ということが私にもしみじみと実感できるのである」

息子の武蔵にとって、直吉は愛情深い心から尊敬できる父親であった。